

12Q4

左頁上半分

左頁上半分に掲載して下さい。

トースして下さい

695P-3/28

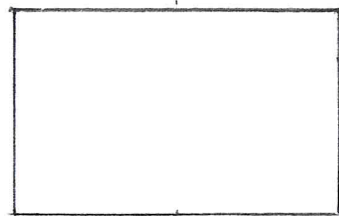
次のような見解がある。

「箱式石棺を伴う」^{ほうしきいしこう}「方形周溝墓」^{ほうけいしゅうこうぼ}から、
 周溝部分を取り去り、^{しゅうこうぶぶん}積石塚を交えたものが、
 「紐和島」^{ひづわじま}（玉名の遺跡）である。

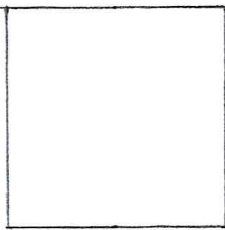
(1) 「紐和島」の箱式石棺を方形に切り替え、
 積石の代りに板石積にたのが「妻の鼻」
 （天草下島本渡市の墳墓群）である。

(2) 「妻の鼻」の方形を円形に切り替えたのが、
 薩摩の板石積石室墓だと考え

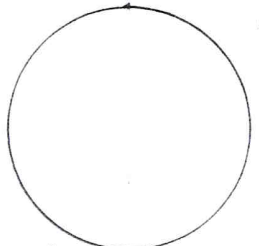
られる。（「妻の鼻墳墓群」熊本県本渡市
 教育委員会、昭和57年3月31日発行、12頁
 参照）



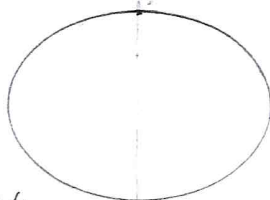
長方形



方形



円形



楕円形

文字の頭を揃える

12Q4

新々(1)-295頁 281頁

本渡市妻の鼻地下室石室（長方形）は、第32回
 韓国扶余郡松菊里遺跡の板石石棺（長方形）や、
 写真図版125 阿蘇下山西遺跡の板石石棺（長方形）
 の延長線上にあるのかも知れない。

680°4/6

12Q4

扶余系殷民の子孫達は、円形を
 好んだようである。

696P-7/11

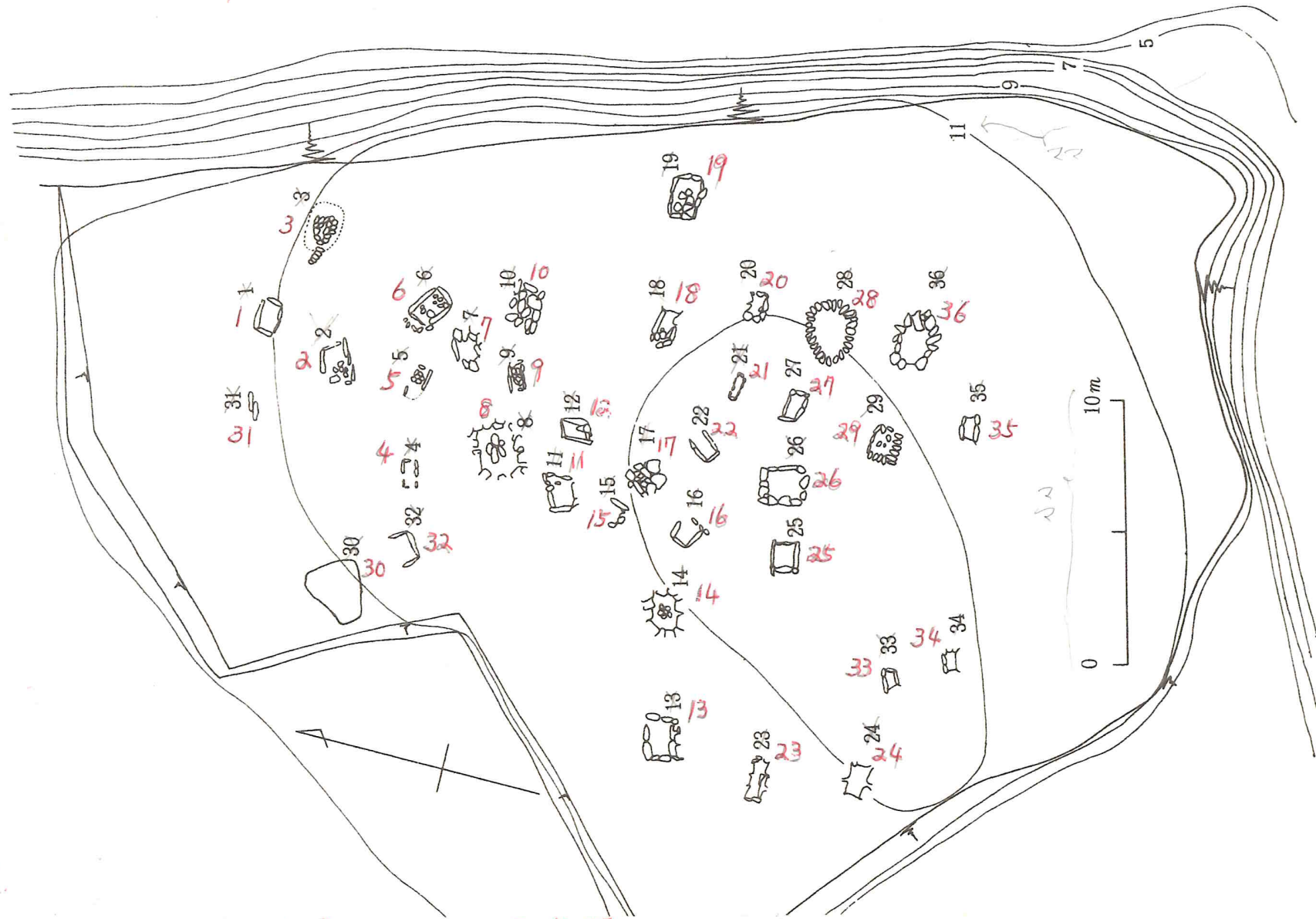
崖墓
 ↓
 地下式横穴墓
 ↓
 高床式古墳

14Q4 第185図 地下式石室の平面形状（推移想像図）

13Q4 『古代の日本』(3)九州、鏡山猛、田村圓澄、角川書店、103頁等参照。

- ・右頁上半分に、はみ出し掲載下さい。
- ・文字を全てゴ4にしてください。

695P 4/28



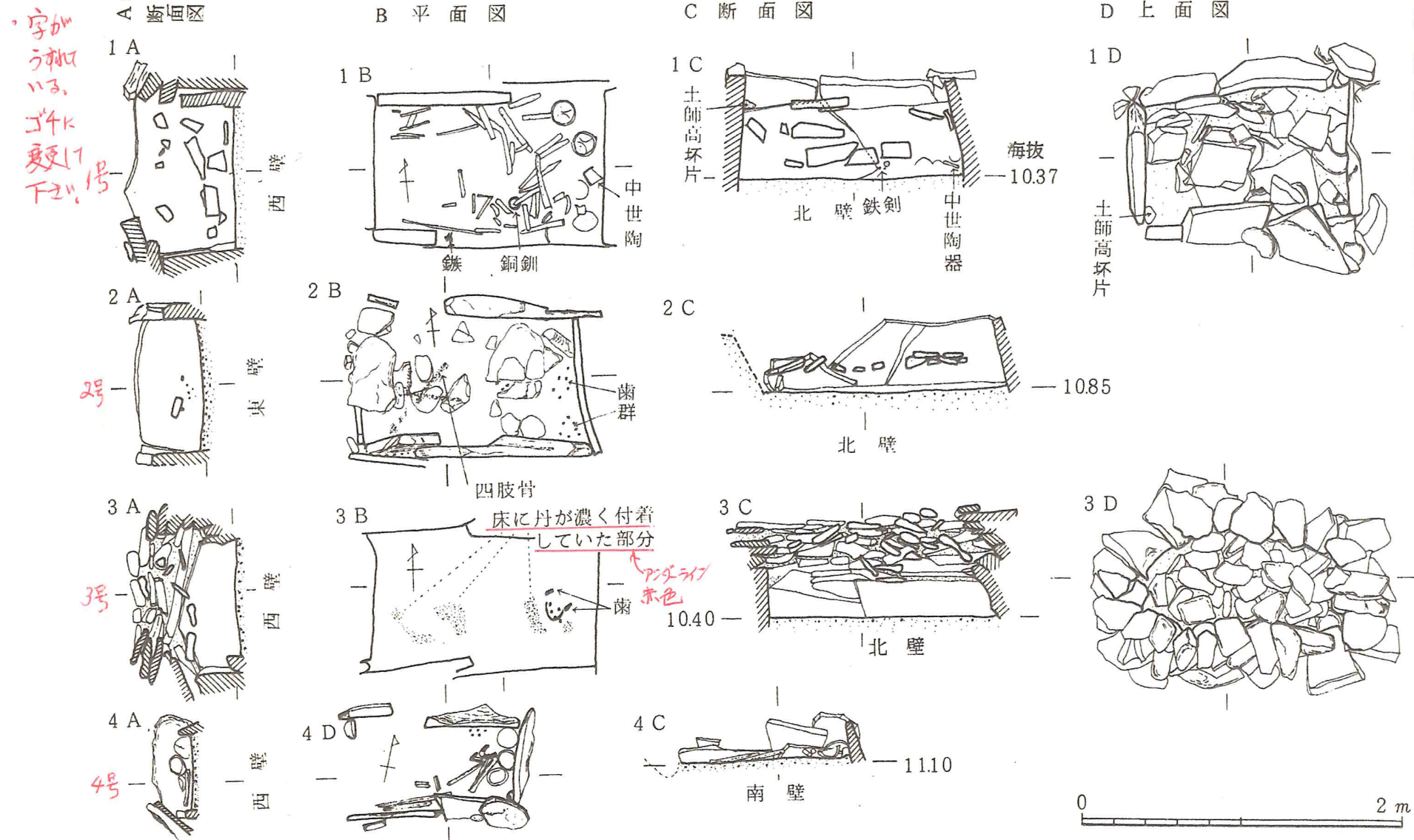
第○図 妻の鼻墳墓群(地下式石室群)地形図
熊本県本渡市教育委員会、昭和57年3月31日発行、9頁参照。

13QG 14QG 第186図 妻の鼻墳墓群(地下式石室群)地形図
熊本県本渡市教育委員会、昭和57年3月31日発行、9頁参照。

362P

695P 17/28
解説

・右図下半分。左右大きくはみ出して掲載下さい。695^P-5/28



14QG 第187図 妻の鼻墳墓群 1. 2. 3. 4号 地下式石室墓実測図 (報告書13頁参照)

・左真全画。大主（ ） 所出に掘削下2m.

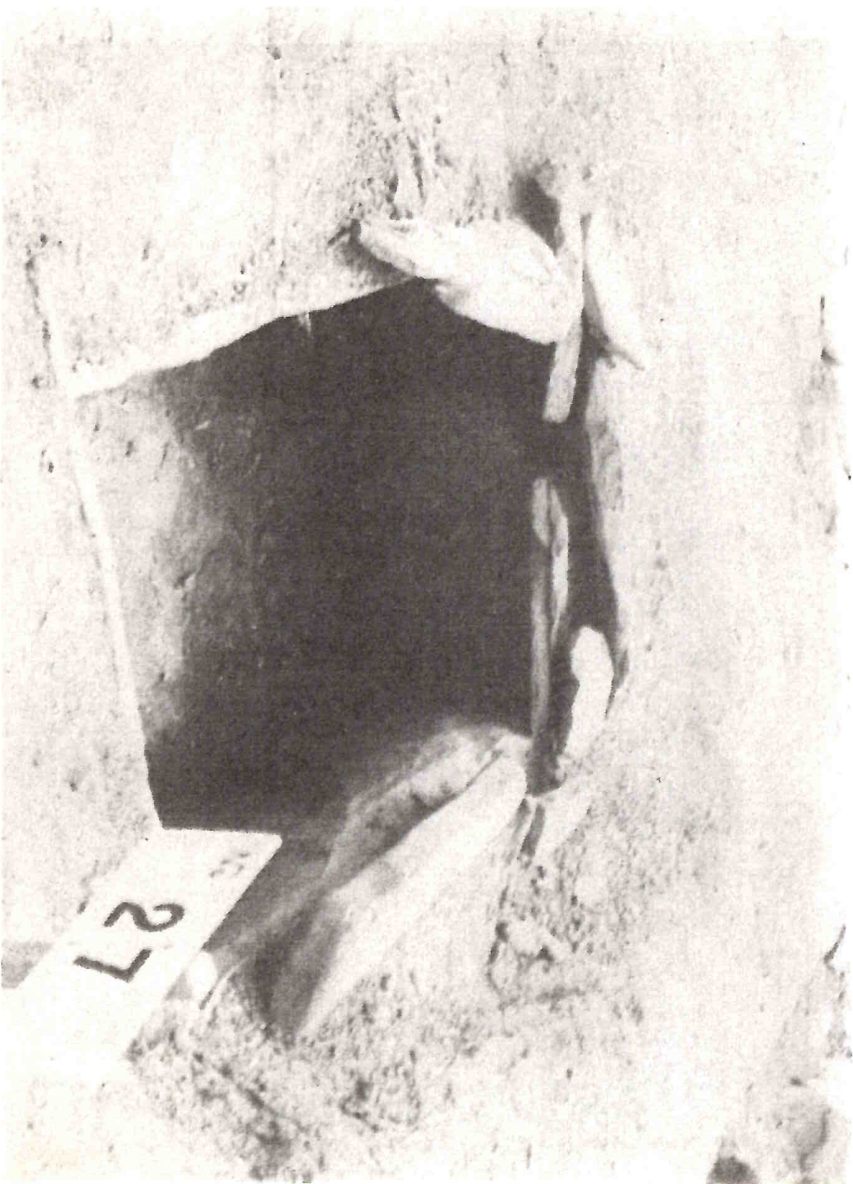


364

→ 白ニ横線を上に

695P-6/28

¹⁴⁰²⁵写真図版 142 妻の鼻墳墓群 17号地下式石室墓 (報告書図版15参照)
・上面部分を示す。



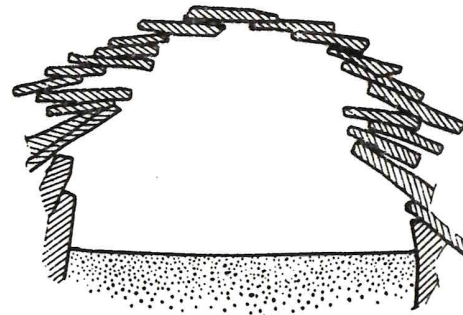
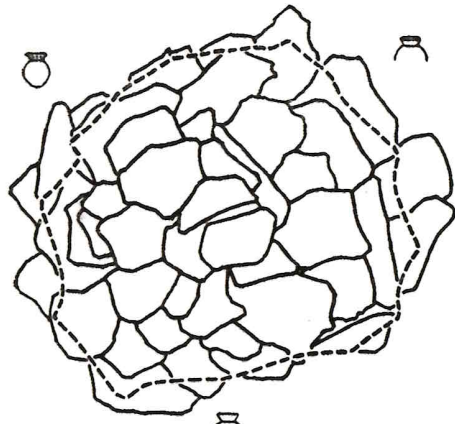
¹⁴⁰²⁴写真図版 143 妻の鼻墳墓群 27号地下式石室墓 (報告書図版20参照)

・上部の板石積を一部取り除いて撮影

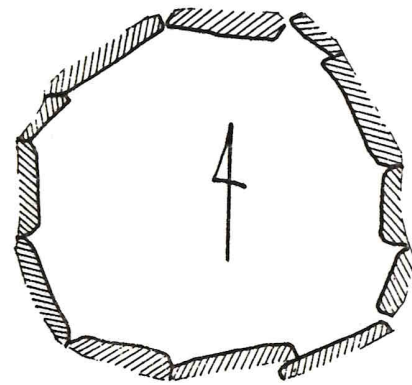
2422^{P-5/6}

・右頁上半分に、大きく掲載
下さい。

695^P-7/28



0 1 m



① 崖墓 → 高塚古墳
南 696^P-7/11

うすん
大住
かこはる著 新 152^Pに付録

1399 → [地下式 板石積石室] →
1429 → 第188図 地下式石室 (円形)
1299 鹿児島県北部、川内川上流のおおぐち うすん
の大口市大住石室第1号

1399

『古代の日本』(3) 九州、鏡山猛・田村圓澄、角川書店、103頁参照。

1299

- 扶余系殷民の子孫達は、隅丸長方形や円形の竪穴式住居を営んでいたようである。
- 人吉盆地や川内川流域等に住んだ扶余系殷民の子孫達は、免田式土器を作り、死者を四角形や円形の墓に葬ったのだらう、と考えてみた。 365

古文 地 2025' 307 カセ
古代の時 3 103P 下
覆石とあ かこし 参考新
146~148P 頑

695P-8/28

695P-13/ 古代の日本 3 103P

同 695P-2/15 5P
↓

「地下式石室は、家族墓を単位とする、部族
この調査結果からみて、
一四六しハ頁参照。阿蘇のベンガラとかどうか、現時点では不明
石の内側に朱塗りされた跡があった。①
ていた横岡七号墳には、地下式石室の壁と天井
・蛇行剣や長刀など計五本の刀剣が副葬され
須恵器片などが出土した。
・金環、よろい、刀、剣、刀子、鏃、土師器
か造られたようである。
・なお、横岡には、二十基以上の地下式石室
頭骨が確認された。
川内市の横岡二号墳では、三休分の
頁参照
また、
室内に三つ五休、多いものは十一休分を追葬
していた。(第187図)八妻の鼻。②一〇三
少ないか、天草下島の本渡市妻の鼻で、一
地下式石室内部に人骨が残存している例は
三、四基、多いときには数十基におよぶ。
この墓制の特色は、群集するといふ点であり
参照
⑤地上には、特別な埋葬施設が見えない
という。(①一四四一六頁。②一〇三頁)

695^P-10/28

箱の寸法の延長線上に

孫^{そん}達^だが、
 地下^{ちか}式^か石^{いし}室^{しつ}
 を築^{きず}いて、
 扶^ふ余^よ系^{けい}般^{ぱん}民^{みん}の^の子^こ

と	ろ
解	う
釈	✓
一	
た	
い	
。	

え、地下式石室に変貌を遂げた

あ、合わせる箱式石棺

ようするに、この一帯では、

扶余系般民の伝統的な箱式石棺(板石を組み

多少形式を変

なるほど、
一見したところ
全然く別種の
の感かん

傾向は互いに類似してゐる。
強いものの次に述べる通り、
副葬品の出土

地下式石室発掘状況の事例をとりあ
 ぎ、地下式石室の分布図をとりあ

參照

古代の日本書 九州 102
かこはきき新 157

695 - 11/28

古代の日本書 九州 103
市町村界51

支那の
地名

おおぐち 鹿見島集北市
かつては金銀の産山が
あった

鹿見島集北市
鹿見島の地下式石室遺跡は全て、川内川上流域
羽月川流域二帯に集中する。
羽月川西部地区では、大口市大佐に三四基
同下殿焼山に十一基が見い出された。
忠元神社に一基以上、同青木に一基以上、
同大田に七基以上、同小本原春村に一基以上
がある。
また、大口盆地の東部山麓伊佐郡菱刈町塞
の神にも三基以上が築かれていいる。
これらのうち、羽月川東部地区において
地下式横穴(追って詳述)と併存するが、
川西部地区では両者併存する例をみない。
この事実、墳墓群集の分布上興味ある現
象で、――墳墓が作られていた当時、羽月川あたりに国境
があるいは部族生活圏の境界があったこと
を示唆しているのではなかろうか。
因みに、大口盆地の東側菱刈地方は天平勝

古代の日本書 九州 106
上段 7所
地目別
ルビ有
新町界52
市町村界52

市町村界51
オキク4市

695^p-12/28

696^p-3/10

宝七年(七五五)五月、大隅国葦刈郡がおか
小たところ、薩摩国伊佐郡に編入されたの
は明治維新以後である。

副葬品 (大口盆地で検出された地下式石室
の副葬品) には、長剣・短剣・大刀・小刀・鉄
鍬などがある。

剣や大刀は、全体として古式に属する。

鉄鍬は、平根菱形式か、もつと多く、ほか
に平根芥矢式、無茎柳葉式・平根逆刺付・平
根二段逆刺付など、変化に富み、古式古墳に伴
うものと同形式である。

(2) 一〇三頁

大口盆地内に築かれた地下式石室の平面形
状には、円形や楕円形が多く、長方形や方形
は少ない。

地下式石室の床面は、大口市小本原春村で見つかった

地8群
4エフオ
2

古代の日本 3 九州 104^P

695^P 13/28

6世紀中葉以降 695^P-1578^P
次頁 18^Pに金環 2

地下式石室群が発見された。	識道場表	鹿兒島県北西隅角部に位置する出水市上智						袖の男子植輪参照	水たのだらうか。(11)と(14)頁で写真図版166篇	口金環二個は「イヤリング」として用いら	る。(2)一の六頁参照	円頭大刀は六世紀中葉以降の所産であ	に用いた金具の残欠があった。	御するのに用いる金具と鉸具(銚を吊るの	具の轡(馬の口にくわえさせ、手綱をつけて	三・五の円頭大刀と鉄鏃数本・金環二・馬	幅二の長方形で石室内に全長六
---------------	------	---------------------	--	--	--	--	--	----------	-----------------------------	---------------------	-------------	-------------------	----------------	---------------------	----------------------	---------------------	----------------

(原) また 満下では、

新419 古代の跡3九州
104° 下段7行

いあ
地地上げ
盛土するこ

695^p-14/28

免田式瑞 695^p-15/15 3~5行

・これらのうち、組織的に発掘調査された第一号・第四号・第五号は平面視円形、第二号・第三号は長方形であった。
・数多くの副葬品が見出し出されたものの、種類は単調である。長剣・短剣・大刀・小刀のほか、鉄鏃やたら多く、攻撃用武器に限らず、水た感がある。弥生式終末期の成川式土器や田式土器、土師器・須恵器が出土した。
・そのほか、工事中に採取された土物のなかには、全長二四センチの矛があり、袋部の下端両側に三角形の切り込みがみられる。
・このような形式の矛は、一般に五世紀末から六世紀にかけて盛行するもので、地下式石室の年代探索に有力な手がかりとなる。
また同遺跡では、昭和八年の地下工工事の際、多くの地下式石室が破壊された。
・とはいえ、金環二、銀環三、短甲一、刀二、石突一、大刀の鞘尻を包んだ金具一、剣一、刀残一、馬の口にくわえさせる金具一式、刀残一。

(原) 一括では理解できない

695²-8 糸巻 能本 地四
 タラギ
 695²-16/28
 小野山町 29² 上段 15² かんた もゆ
 「能本の工代直経」190²

詳細については、
 人に成る場合が多かつたのたうか、
 とも思われれるが

* 球磨地方に在る扶余系最良の玉珠連は、
 地下式石室より、
 木棺や木槨墓

のかない。(2) 五頁参照
 形式はいす、小、平面、丸形、楕円形、
 長剣・短剣・鉄鏃のほかに見るべきも
 墓以上、同多良木町大久保に三墓以上
 基、
 人吉市原田町芝毛に二墓以上、同尾園に
 現在知られているものとあけると、
 肥後南部の球磨地方にもおよんでいる。
 地下式石室群は、峻峻な九州山脈を越えた
 土の石棺、同船間島の竪穴式石室なども、
 一、四、五頁参照

トル
 市の51² 無

695^P-17/28

223319

④ 695^P-4/
14行

トル

トル

・さらにこのような墓制（地下式石室群）は、
海を隔てた天草下島の本渡市妻の鼻において
三五基発見されていゝる（第185・361・186・362・187・363
区。写真図版142・364・143・364）
・この遺跡は、海に突出した岬の先端部、約
一三〇平方メートルの丘に密集する。トル
・地下式石室の平面形状は、
鉄鍔などの攻撃用武器であり、長剣・短剣・大刀・小刀・
大口盆地ヤ
出水市溝下の諸例と、本質的に変わりない。
・一か一なかに、銅剣（腕輪）や鉄剣・滑石
製勾玉・同小玉・碧玉製管玉・ガラス小玉
等の装身具をはじめ、鏡（仿製鋸歯文帯鏡）
や鉄製の鐲（毛抜）を伴う場合もあり、すで
に新しい高塚古墳文化を受けいれたこと
が明らかである。
・茅の袋部下端両側に三角形の切り込みがあ
るものも出土した。
・地下式石室の内部へ落ち込んだ土師器中

の上限は、弥生中期（紀元前後）にまでさかのぼるようである。

このように、地下式石室の分布と、免田式土器の分布との間には、濃密な関連性がある。

（既述）

五島列島の北端部からも、免田式土器が出

字松原において、地下式石室ふうな石棺が一

和泉式の高坪が含まれていいる下

など、それらの時期は五世紀末から六世紀前

① 695^P - 10/15 溝下 免田或土塔

と言わ
れ
て
い
る
。
(
①
—
五
—
頁。
第3表参照
)

また、新文員11名

大口地方や出水市溝下にて、地下式石室を

刃から、弥生文化
終末の
免田式土器
、成川式

土と器
(薩摩式壺形土器)
●高坏なとりかみ出土す

ま
せ
か
かん

か
く
い
う

へ
ん

と
つ

この墓制の下限については、
確実な例に接

1
た
11
か、
六
世
紀
中
葉
以
降
で
あ
る
3
L

と
い
う
。
（
②
一
一
〇
五
し
六
頁
参
照
。
一
部
重
複
）

14

きんねん }
ちか }
せきいつはくつちうさ }
きう }

図な
あ、
近年の地下式石室発掘調査により
興

味深
い
事
実
か
海
々
と
明
ら
か
に
な
っ
て
い
る
①

一四六七一五五頁
(他参照)

うんご
さう
せりざ
こらさつ
おニ

今後、更に
了精査、
考察を行
なすこと
と

30

産出地

人吉秘史 30

695²-20/28

人吉秘史 28

人吉秘史 28

南九州の鉱山

南九州地方で産出する鉱物について、こゝ

簡単なからボのバツミよう

人吉市内から東北東約十時の深田や、

人吉市北方の五木の両銅山では、含銅硫化

鉄鉱を採掘していたが、目下は休山らしい

人吉盆地の東方すく、県境に近い宮崎県大

河内や大敷にも銅山の跡があるが

人吉盆地内やその周辺に本格的な鉄の産地

は無いか、標本程度のものはみられる。

例えは、上村(人吉盆地南域)八峯近くの

河岸に、硫砒鉄鉱の露頭を見ることができ

その産地から西南五時に鉄山と称する標高

七一五・三の山の、その西一・五時に鉄山

鉄山と称する地名があり、鉄鉱脈が存在す

る

る

る

る

という。(「人吉市史」第一巻、人吉市教育委員会、昭和五十六年三月発行、二八一二九頁参照)

＊

人吉盆地の西南部に隣接する大口鉱山。

山の両金山はいわゆる北薩地方鹿児島県北部には古くから著名な金銀鉱山がある。

(「人吉市史」第一巻

人吉市教育委員会、二七―二八頁参照)

大口市牛尾にある金山

大口市牛尾金山と旧大口金山および周辺鉱区

を合わせて経営している。

浅と書いてある

新第三紀輝石安山岩中の浅熱水性含金石

英脈は、自然金、輝銀、王、骨質石英、石英

方解石、氷長石からなり、微量の黄鉄鉱、黄

銅、輝安、辰砂、水銀と硫黄との化合物

深紅色の六方晶系鉱物。塊状で産することか

多い。朱砂・丹砂・丹朱とも称される。

鉛、閃亜鉛、雄黄などを随伴する。

・鉛石の含金量は、平均十一・十五パーセントで、

新井村
51
④五

人吉市史 第10回
地図中の金山とあり

695^D - 22/28

次頁から

百利 ⑧-98'

百科④-155?

年ねん間かん約六万シ（一九七〇年）のこうせき鉾石こうせきを採掘さいくわうし
ている。↑
という。へ「世界大百科事典」平凡社おおいちや人口
こうざん 鉾山こうざん ✓ 参照
木なお、まかんゆうりき金含有量かんせきが岩石いんせき一シ当あたり約四くわ以上じょう
なければ、採算さいさん加と水なりといわれる。戸トル
へ「世界大百科事典」平凡社へ金きん ✓ 参照

Slide 695^E-24/28

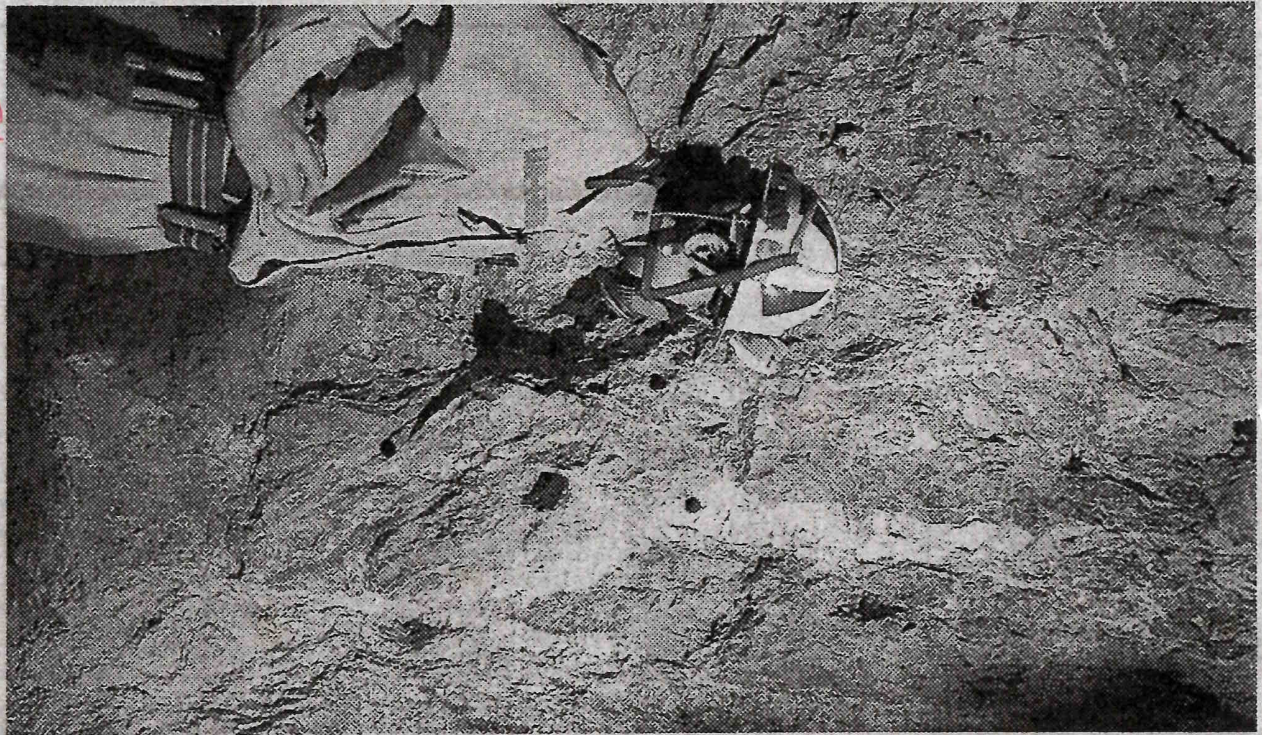
カ
↑

↑ 白い線の部分から要です。

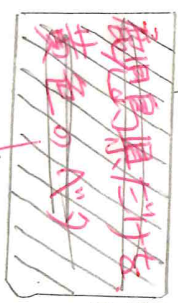
↑

カ
↑

695^P-24/28



掘削の先端部「切り羽」の岩盤に、
白い筋状の鉱脈が見える＝鹿児島県
伊佐市の菱刈鉱山、溝脇正撮影



382

写真図版 144 金の鉱脈

140^G 中心いわけ

『朝日新聞』平成25年4月2日付＜鹿児島県、菱刈鉱山＞参照。

130^G

金田と田色と

695^P-25/28

第に資源が枯渇し、金鉱山は次々と閉山して
いった。

・現在、国内に残る金鉱山は四つとされ、
最も鹿児島県にある。太古の火山活動が、豊
かな銀脈を生んだようだ。赤石、春日、岩戸
の産出量は、それぞれ菱刈銀山の数十分の1
以下である。

という。〔朝日新聞〕平成二十五年四月二
日付「鹿児島県にピカイ金山、菱刈銀山、埋
蔵量は94億円分」参照

薩摩半島南端、指宿市池田湖北岸地域の
金山は分布略図を掲載しておくことにし
う。〔第189回参照〕

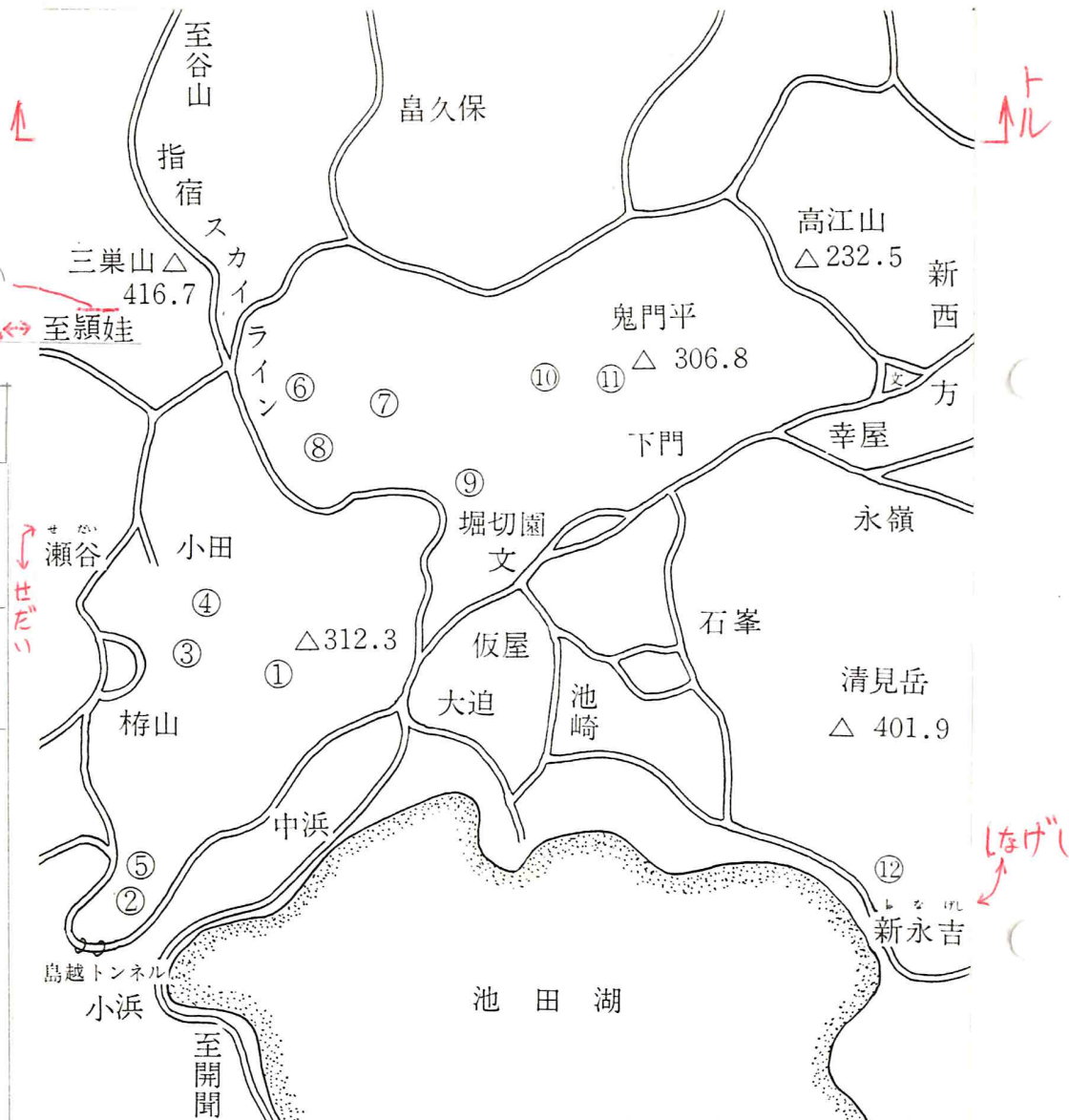
1250M 薩摩半島南端域の

695^P-26/28

- ・ 頁の上半分に掲載下さい。
- ・ 文字がかすれている。
- ・ ゴチャクに交えて下さい。

⑬ えい 三巢山△ 416.7 至額娃
 額の字を
 少く下げて、
 高さを揃えて下さい。

⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	番号
荷床	仁田平	岩平	宇都	花籠	河内山	金切	烏帽子	日影	小金	立神	大谷鉦山	鉦山名
金・銀	金・銀	金・銀	金・銀	金・銀	金・銀	金・銀	金	金・銀	金・銀	金・銀	金・銀・銅	鉦種
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	在
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	地
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(地区)
新永吉	鬼門平	鑑坂	宇都	花籠迫	スリガ迫	金切	烏帽子	日影平	小金	立神	指宿市池田字大谷坂	
(新永吉)	(下門)	(下門)	(仮屋)	(堀切園)	(堀切園)	(堀切園)	(中浜)	(大迫)	(大迫)	(大迫)		



第189図 指宿市池田湖北岸地域の「金山」分布略図

『指宿市誌』指宿市役所、昭和60年10月25日発行、32~35頁、661~665頁参照。

・ 池田地域では、幕末から終戦前にかけて、盛んに採鉦精錬がなされていた。384^P

H25.4.25

朝日

百科事⑧ 98P

百科④-155P

金 60kg

60,000

695-22/28 2頁前に記載 10 10,000,000g = 60,000,000g

地名辞 407, 500 大「合金」 主要成分

695-27/28

といる。 (「帝国地名辞典」太田為三郎、名

・金や銀の採鉱を行なっている。

の所有するところとなった。

薩摩藩主島津家が稼得。明治十五年(一六八三)以来

江戸時代前期の天和三年(一六八三)以来

会する所)には、鹿籠鉾山が有る。

■ 枕崎市の北約四〇キロ(田布施川と金山川が相

要成分の一)など産出する。

とす(一帯)から、金・銀・錫(青銅器の主

鹿見島、薩摩半島南西部(加世田市を中へ

なれば、採算がとれないといわれている。

世界大百科事典「平八社(金)参照」

といる。 (「世界大百科事典」平八社へ大口

鉾山(参照)

＊なお、金含有量が岩石一トン当たり約四〇グラム以上

年(約六万トン(一九七〇年)の鉾石を採掘し

トル(ダブリ)

市町村番号47² 資料番号 16-520¹

695¹-28/28

1F 8/8

*

著出版へ川辺郡へ鹿籠山⁴⁹⁹ 参考
 昔から鍛冶屋があつた加世田あたりの家々
 では、毎年「金山講」やら「ふいご祭り」を行なう。
 火を使用する鍛冶屋には、一切の汚水を除去する厳しい禁忌があり、特に鍛冶屋の人々は禁忌を重んじてきた。
 そして仕事場は、神聖で清浄なものと考えられていた。
 という。(「加世田市史」加世田市史編集委員会、昭和六十一年十二月発行、三二〇頁。三一頁の地図参照)
 薩摩半島東岸の谷山^{大正 初冊 52} (鹿児島市の南約七^{かごーま}里) から、錫が採取される。
 約五^五の尾平^{おひら}山も、錫の産出地である。
 という。(「世界大百科事典」平凡社へ錫^{すず})
 参考

697-17/18 18頁
696-2/18 696-6/11 9頁

697-13/13 類文 次々

696-1/11

かご1 参考新
154 下段

下げる

照) 中国福建省の崖墓から (倭人の祖先達の墓制の一つか)
室へ移行しているのかも知れない 横穴式石
南九州へ特に、大口盆地の羽月川以東・宮
崎県南部域一帯・大隅半島基郡東北隅の志
布志湾 (有明湾ともいう) 沿岸地域には下
実(に)特異な墓制(ハ)地下式横穴と呼ば
れる墓(ハ)があつて、考古学者らを悩ませて
いる(以下)第177頁(ハ)南九州の墓制分布図
第190頁(ハ)九州の墓制三地域(ハ)第191頁(ハ)地下式
横穴(ハ)参照) 形式は変化に富むものの
基本的構造は、(1)地表面から垂直に掘り下げた
堅坑(ハ) (2)その底部から横に掘った(ハ)羨道(ハ) (奥の玄
室と堅坑とをつなぐ通路) (地下式横穴の主
要部分) (3)死体を安置する(ハ)玄室(ハ) (地下式横穴の主
の三要素から成つてゐる) (1)一五四頁参

697-1/13

朝日新聞 4月
古墳の地下式

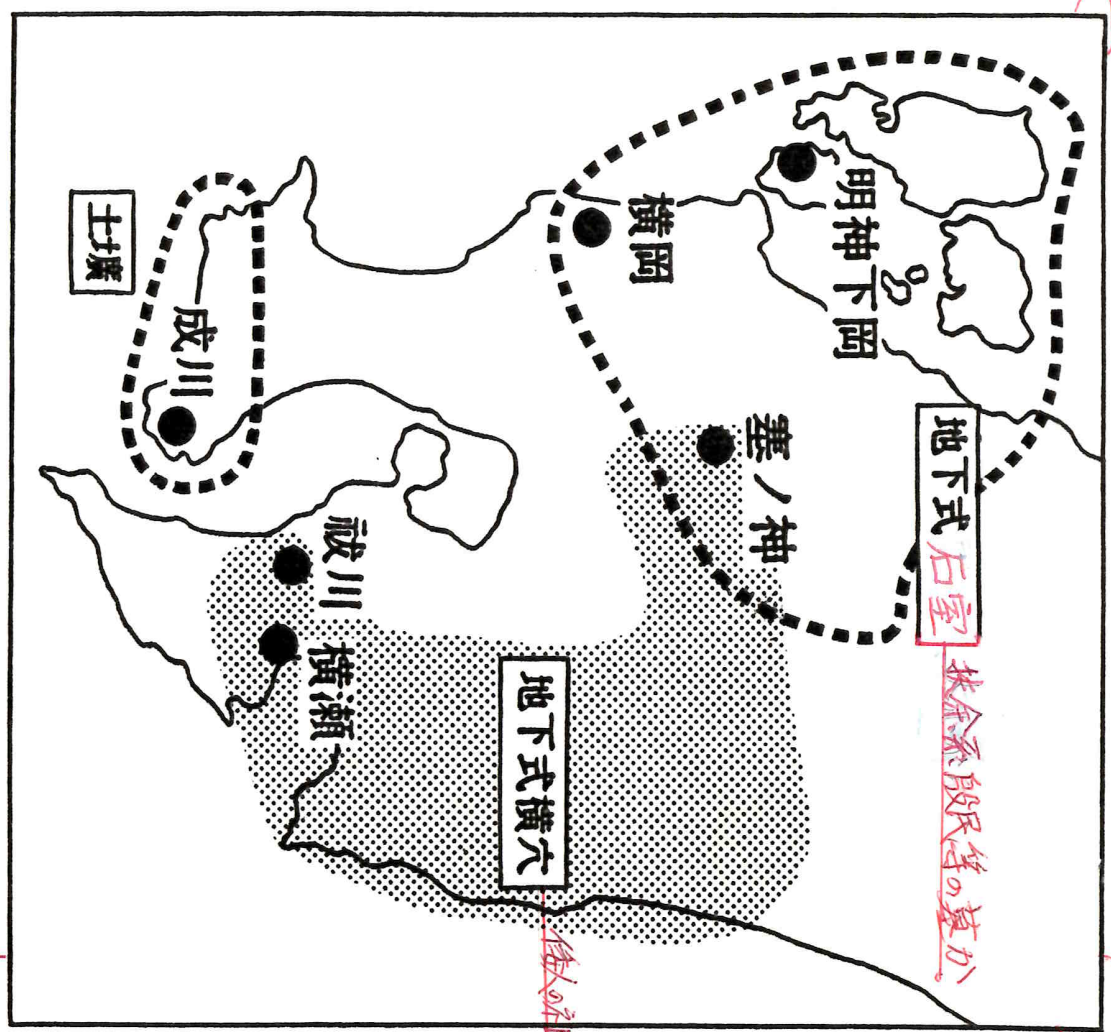
2/100

右側の左側半分、
上下段にわたり、大きく掲載下さい。

OK
696-2/28

枠を1-11

枠を1-11



696-2/11

1464

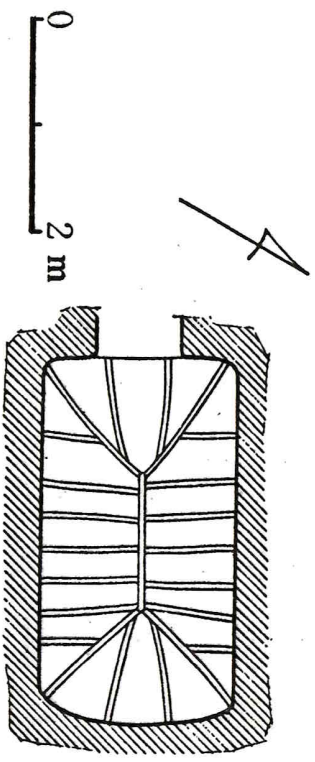
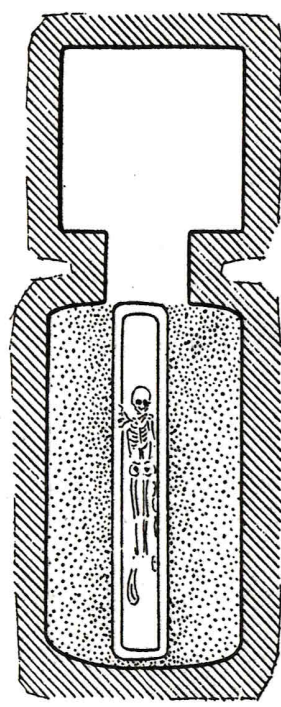
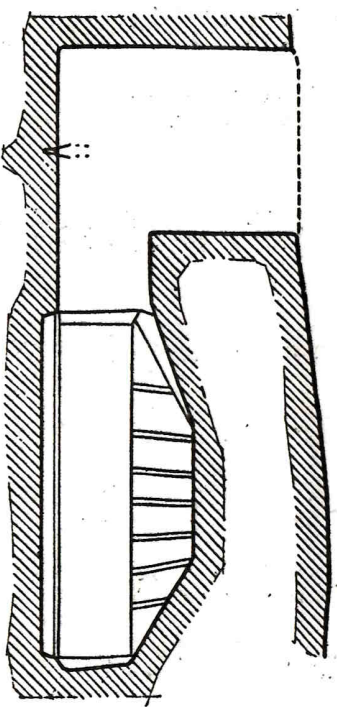
1364

第190図 南九州の墓制三地域
『かこま考古新地図』南日本新聞社、雄山閣、146頁、155頁参照。

Acc! 698-8/12

177回 南九州墓
303頁の分布

・ 左の右側半分、上下段とわたり、大々掘載下す。
 * よい水を除いておいて下す。
 (原本に よい水がある)



696P-3/11

1464 第191図 地下式横穴 (宮崎市西北約12kmの六野原第2号)

1364 『古代の日本』(3)九州、鏡山猛・田村圓澄、角川書店、100頁参照。
 1264 『古代の日本』(3)九州、鏡山猛・田村圓澄、角川書店、100頁参照。
 ・ 玄室天井の内側には、寄せ棟形の屋根をかたどって、線条が周りに貼られている。

697P-1/13 14頁

697P-5/13 8頁
 398P

赤色地

「六野原」にある。
 697P-3/10 25頁

696P-6/10 ま
 崖の上から遺体を降ろす

697P-5/18 14頁
 寄せ棟形の

696^P - 4/11

② 696^8
— $8/11$

封土を挿つ例もある

見た。 → 原「いた」

④ 695°-8/7 ~

391

のではなからうか

伊佐郡 地緯 108°
北伊佐郡 " $529'$

地名舒
1303^P

と想像される(第191図へ地下式横穴(第192図参照))

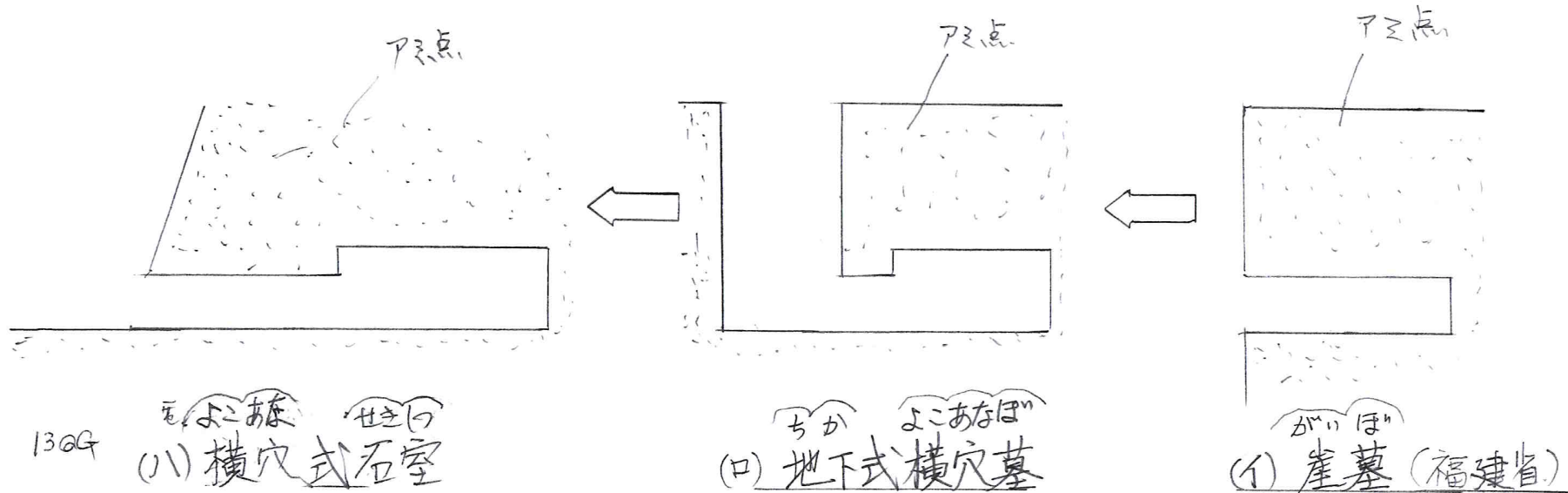
たから 崖の下から 洞窟へ 遺体を運び上げるのは困難
崖の上から 洞窟へ 遺体を降ろす
たの ではないか。
い 山中の崖墓内へ 遺体を運び出す
た いう。第六章『崖墓』において既述
か あり、これらの洞窟のいくつかに棺が置
さうした崖の処々に、自然に形成された洞
窟がある、これらの洞窟のいくつかに棺が置
か いていた。
と いう。第六章『崖墓』において既述
太伯の後と自称する者達が、居住地から遠
い 山中の崖墓内へ 遺体を運び出す
た ではないか。
な お
へ 崖の下から 洞窟へ 遺体を運び上げるのは困難
たから 崖の上から 洞窟へ 遺体を降ろす
ていたの だろう
と 想像される(第191図へ地下式横穴(第192図参照))

脈 福建省と江西省との境に聳える武夷山
の 山中には、切り立った多くの崖がある
先 述のとおり、
感 強い。
か かし、そう思わせる事柄が多々ある。
な るほどこう記せば、
へ 到底信じ難い
感 強い。
か かし、そう思わせる事柄が多々ある。
な るほどこう記せば、
へ 到底信じ難い

696P- 7/11

436(2018)2.6 作図④

- ・ 頁の上半分に、大きく掲載下さい。
- ・ トレースして下さい。
- ・ 線の太さを、0.4ミリにして下さい。



140G 第192図 崖墓から横穴式石室へ至る縦断面形状の推移 (想像図)

う かやふさあへずのみせ ぎきつき あひら たい すいり

・ 盧^う鳥^{かや}鵲^{ふさ}草^{あへ}葺^ず不合^{のみ}尊^せの墓所は、陵墓要覧に、鹿^き見^き島^あ県^{ひら}所^り属^り郡^り吾^り平^り町^り『洞窟』とある。

393 北に185°左に

武表山中の崖墓 由557-3/3 由697-17/18 28/7
由695-3/28 地下式石室の平面形状推移

ほとんどの場合 地と土に 似ていない
696-8/11

696-8/11

・封土 700gの千あつ
・副葬品が類似
・容形 製作開

大屯 700g
そこそことあること
11=7/100 (土代味)
直張又 土代の味 前々頁 19行

の墓制分布図参照	地下式横穴とが混在する。(第177図へ南九州)	(後述)	地下式横穴の上方に、封土を持つ例もある。	似てゐる。(後述)	横穴から見出しされる副葬品とは、極めて酷似	後方墳などから出土する副葬品と、地下式	高塚古墳(前方後円墳・円墳・方墳・前方	三者の傾向は似てゐるといえよう。	(第190図へ南九州の墓制三地域参照)	南東部一帯のそこにここに点々と造られた	③そのほほ同く地下式横穴も、九州	いる。	まつてゐるわけではなく、あちこちに点在して	近畿地方に築かれた陵墓は、一箇所(大屯)に纏
----------	-------------------------	------	----------------------	-----------	-----------------------	---------------------	---------------------	------------------	---------------------	---------------------	------------------	-----	-----------------------	------------------------

696° - 9/11 599° - 1/3

697° - 2/3

と
い
思
っ
た
の
で
は
な
か
ろ
う
か。

このように、
へ倭人と、九州南東部地域とは、
密な繋がりがあったから、
宮崎地方は、肥の国の一部とされた。
日向の地をも併せた広大な地域を指す。
日向の地は、肥前・肥後北半のほか、
という。(「古事記」新潮日本古典集成、新
潮社、三一頁、注八参照。)
「共立」において既述。
① 閩越の東には、大海原が広がっており、や
や大きな島、台湾が間近にある。
② 日向の東にも、大海原が広がって、や
や大きな島、四国が間近にある。
と、似た類似点が見られる。
倭人は、
へ閩越地方と日向地方とが、
地形的に似て

⑦ 697' - 1837 ⑤ 699 214/25

虫池行剣 かご子孝吉
146 ~ 148

⑦ $697^2 - 8/13$

⑤ $697 = 3/18$ 814

短冊に書かれた
たのき

かごほろふ新
156P

規 ^{公和} 慶屋 以主の主」此れ世々有る

(写真図版) 164/165 へ蛇行状鉄器および旗
 北背に取り付ける 口旗立て (か) 馬の

蛇行剣が検出された
① 西六八頁一五七頁参照
・志布志湾西岸下国鉄大崎駅近くの竜相地下
式横穴からは、貝輪・骨製かんざし・剣など

蛇行剣が検出された。
①西大八頁一五七頁参照。
志布志湾西岸下国鉄大崎駅近くの竜相地下

骨製かんざしのほか、宮崎県でよく出土する蛇行剣が検出された。
① 西六一頁一五七頁参照

原はらの地下式横穴ちかこよこあなから刀とう子す・イモ貝かい製腕輪うでわ・
・肝属郡高山町（志布志湾の南西約七キロ）上

肝属郡高山町
(志布志湾の南西約七十里)
上

下式横穴か
い
く
つ
か
あ
る

すゝ	短
志	甲
布	や
志	胃
瑠	加
沿	見
岸	い
に	出
は	さ
特	小
異	た
な	被
副	川
華	貴
品	跡
を	の
持	み
つ	な
地	ち
	ら

短甲たんこう やかぶと 胃い 加か 見み い 出で 之これ たは 祓はら 川かわ 貴き 跡あと の み な ら

も特筆之水
① 一五六頁
② 一一〇二

つかった。(写真版 145 へ短甲と甕^{かぶと}参照)
 ・この地域に、前方後円墳や円墳が多いこと

つ
か
つ
た。
(写真図版
145
へ短甲
と曹
参照)

下式横穴 下は、剣や刀のほかに短甲と胃が肩

肝属川の上流に位置する
鹿屋市祓川遺跡地

華な副華品加多
い

志布志湾沿岸の地下式横穴には、鏡など豪華

地下式横穴の副葬品には、畿内文化のにお

- ・カラー
- ・頁上半分に大きく掲載下さい。
- ・「著作権許諾書」をもらわなくてはなりません。
- ・明るくしておいて下さい。

「かみいほぎまがね」156頁に「同書
有る
由697^p15/18に短甲の字有る

696^p11/11



397

※「著作権許諾書」をもらわなくてはなりません。

1499ゴ4

写真図版145 鹿児島県鹿屋市永成川遺跡の地下式横穴墓から出土した短甲たんこうの衝角付背かきつき

(県指定文化財)

中心部かけ
1399ゴ4

鹿屋市教育委員会文化財センター提供

と一緒、^{（内行花文鏡の模倣）}内行花文鏡が出土して、
（旗立て）
は緑の無蛇行剣や鏡は、むしろ一般庶民に
とすれば、^{（地下式横穴に葬られた人物）}地下式横穴に葬られた人物
は、かなりの権力者だったという（こと）に
また、副葬品だけでなく、^{（地下式横穴の構造）}地下式横穴の構造
造そのものにも、^{（畿内文化の雰囲気）}畿内文化の雰囲気が漂う。
たとえば、遺体を安置する玄室を見てみよう。
平面形状は、長方形・方形・円形などと様
々だが、^{（玄室の天井は、ア）}玄室の天井は、ア
千形のほかに、^{（切妻形、寄せ棟形）}切妻形、寄せ棟形が
（第191図）天井が寄せ棟形の例（参照）
つまり、地上建築物の屋根をかたどってお
り、注目される。（①—一五七頁参照）
先に、^{（武夷山）}武夷山の中、^{（崖墓内に置かれた）}崖墓内に置かれた木棺の
蓋、^{（山岳地帯）}山岳地帯（あるいはその近傍）に任んでい

内行花文鏡の模倣

①697-9/13

内行花文鏡

ここ
かこ157下
末7行~

697P-2/18

カトル
550P

た者亭の家は、高床式であつたろうと考えら
れてゐる。
と述べた。(第六章『崖墓』において既述)
(口) 多分
へ志布志湾あたりを墓所と定めた者亭の家
も、高床式だつたのだらう。
と推察される。
(ハ) いや、双方共々
へ太伯の後と自称する者亭の家だつた可能
性か大きい。
ように思われる。
*
地^ち下^か式^{しき}横^{よこ}穴^{あな}の^の玄^{げん}室^{しつ}の中^{なか}に、^{かろい}軽^せ石^{いし}製^{せい}の^の石^{せつ}棺^{かん}
を^を置^おいてゐる^い場^ば合^あが^があ^ある^る。興^{きやう}味^み深^{ふか}い^いの^のは、そ
の^の石^{せつ}棺^{かん}が^がまた^{また}家^{いえ}形^{かた}にな^なつ^つて^てい^いる^るこ^こと^とだ。
・石^{せつ}棺^{かん}は、加^か工^{こう}した^{した}軽^{かろ}石^{いし}の^の板^{いた}を^を組^くみ^み合^あわ^わせ^せて
造^{つく}ら^られ^れて^てお^おり、^{その}内^{ない}部^ぶは、^たい^いて^てい^い赤^{あか}く^く彩^{さい}
色^{いろ}さ^され^れて^てい^いる^る。(木^き阿^あ蘇^その^のベ^ベン^ンが^がラ^ラか^か塗^ぬり^り水^{みづ}
で^でい^いる^るの^のか^かど^どう^うか^かは^は不^ふ明^{めい}い)

②-100^p下8^行

と

原 接合し、後続⑥697^p-6/18 4^行
かごまき新158^p
697^p-3/18 古代の日本3^巻 102^pニ

古代の日本3^巻 102^pニ
HIV

平面視長方形の石棺は、人一人を伸展葬で
きるくらいのものである。

有明町原田の地下式横穴の石棺は、
蓋石が五枚、側石は一枚と一枚、小口は各一枚
計二十六枚の石を用いて作られた。
長さ一丈四の地下式横穴の石棺は、
蓋石が五枚、側石は一枚と一枚、小口は各一枚
計二十六枚の石を用いて作られた。

特筆されるのは、高山町上原の地下式横穴
から出土した立派な造りの家形石棺だ。(④頁図146^p参照)
石側板の両端が、丁寧に切削加工されている。
側板の接合面が互いに嵌め込み式となっており、
確実に接続し、形崩れしないように工夫され

たとえ「考えられぬ」
恐らく、鉄製の工具を用いて加工したのであろう。
床には、平らな石が敷き並べられている。
その精巧な造り、高度な技術は、この石棺
の被葬者がただ者でなかったことを語っている。

①一五七^p八頁、②一〇二頁参照

この石側板が、高山町近傍で作られたのか、それとも
薩摩方面から船で運ばれてきたのか、現時点では分からない。

宮崎市西北約十二^{km}の六野原古墳群には、

12.5^{km} 高塚式古墳ばかりで

697^p-4/18

・ 頁の上半分
大きく掲載下さい。



142G

写真図版 146 みごとな造りの軽石石棺 高山町・上原地下式横穴出土 → 右つめ
110G = 同町歴史民俗資料館蔵

132G

『かごしま考古新地図』南日本新聞社、雄山閣、昭和61年6月発行、158頁参照。

697P-5/18

697-1/13 屋根をかたどっており 古代の田舎3九割100P F5
10行~

なく、二七基の地下式横穴がある。(第191図)
 六野原第2号地下式横穴の図(参照)
 うち第八号の墓室はかなり大きく、奥行き
 五・四〇び、幅一・八六び、高さ一・一二び
 もある。
 ・天井は、切妻の屋根形(棟を界として両方
 に流水を持つ、書物を半ば開いて伏せた形)で
 あり、これに垂木様の線条を周りに入っていて
 あたかも家屋の内部のようだ。
 ・副葬品には、刀五、剣四、刀子一、斧一、
 鉄先一、鉄鏃多数、眉庇付青一、三角板皮綴短
 甲一、鏡一、丁字頭勾玉一、砥石一などがあ
 った。
 刀には、日直弧文(太いゴウ)を周った鹿角
 装大刀一が含まれている。
 ・勾玉や甲冑の様式からみて、この地下式横
 穴は、五世紀中葉以前にさかのぼると考えら
 れている。
 六野原には同様の地下式横穴が数例あって、
 第十号からは、刀七、剣四、鉄鏃数十、轡一、

④695P-8/ 大田地地下式石室

11行
②-103~4頁

古代の時3九州101¹ F段

697P-6/18

④697P-3/18 11行

せつぞく
接納

古代の日本3九州100頁下8行~101頁

1472 内行花文鏡
④697P-1/18
15行

出された。平根菱形式鉄鏝三、三角板鉄留式短甲一が検
らへ、えびの町大字島え内杉原の十基中の一基か
土と文の浮き彫りをほどこした鹿角製装具が出
刀子・鉄鏝・斧・土師器などのほか、剣・大刀
・都城・市川・東・牧原の二〇基から、
・小らの地方は、
・高塚古墳
・式横穴一色の感がある。
・市・えびの地下式横穴は、
・多数見出し、
・都城・市・小林
・後続するものとて注目される。
・(2) 一頁参照
・胃・形・文・鏡・一・や・横・短・板・鉄・留・式・短・甲・一・
・眉・底・付
・鉄・先・一・土・師・器・二・同・坏・二・の・ほ・か・下・
・仿・製・の

からは
では

697^p-7/18

から

羽月川東岸地区まで分布する。(既述)
方からは発見されな(既述)
・後人達は「扶余系殷民」の領有域内に下地
下式横穴を穿とうとしなかつたのではなから
うか

地下式横穴は、北薩摩の大口盆地を流れる

頁参照)

古式の馬具が出土したという。(2) 1-1-1

中葉ころ盛行する。

・この短甲には皮の小丸(小板)を黒漆で塗り
り固めた草摺(鎧の胴の下に垂れて大腿部を
覆うもの)が綴られており、畿内では五世紀
中葉ころ盛行する。

大丸
小丸
小丸
小丸